

ゲルマン語の「手」について

Über das Wort „Hand“ im Germanischen

Kagoshima Shigeo, Jura an der Toin Universität in Yokohama

鹿兒嶋 繁雄

桐蔭横浜大学法学部

(2013 年 9 月 27 日 受理)

1. ハンサム (handsome) の hand- は「手」?

ゲルマン語 (以下 ger.) における身体名称「手」は、他の身体名称と同じく、語源が不明なものはない、という。(1)「手」(Hand) に関して、ラテン語 (以下 lat.) manus, ギリシア語 (以下 gr.) χείρ に対して、ger. の最古層であるゴート語 (以下 got. 340 年) handus は 共通 ger. 独自の単語で、「目」を表す現代語 (以下 nhd.) Auge は、got. augo, lat. oculus, gr. ὀφθαλμός, 「足」Fuß は、got. fotus, lat. pés, gr. πούς (pous) とインド=ヨーロッパ語 (以下 ind-euro) で「手」だけ「共通性」は認められない、という。

たしかに、身体名称としての「手」は got. 以降、古高ドイツ語 (以下 ahd. 600 年～1000 年) hand、中高ドイツ語 (以下 mhd. 1100 年～1450 年) hant で「腕から先の部分」を示す身体名称である。だが一見すると「手」と関連する単語のようであるが、「手」と何の関係もない単語に、現代英語 (以下 engl.) handsome 「〈男性が〉ハンサムな (good-looking)、美男子の; りっぱな 〈特に内面的なものが反映された魅力的な男性をいう〉; 女性については普通 pretty, lovely, beautiful を使うが、「りりしい、きりっとした」顔の女性あるいは中年以降の女性の美しさには handsome を用いることがある。」語源は、「取り扱いやすい人」としている (3)。

「扱いやすい人」という説明と「内面的なものが反映された魅力的な人」との関連が曖昧。むしろ「扱いやすい」と「内面的なものが反映された」という内容は正反対の概念で「扱いやすい人間」は馬鹿にされこそすれ、魅力のある男性とは言い難い。逆に「人を容易に扱う人間」も魅力的とは言い難い。

engl. handsome の hand- は全く別の単語に由来を求めねばならないであろう。

ゴート語は、以外にも「世界言語」で、北はロシアからアフリカにおよび、(東)ローマ帝国、ギリシアという文明国と接している。4 世紀においては、8 世紀のドイツ語をその独自性と吸引力において凌駕しているからである。(4)

2. got. の handus 「手」

①マタイによる福音書 (以下 Mt.) 5,30

got. jah jabai taihswo þeina handus marzjai þuk, afmait þo jah wairp af þus ei fraqistnai ains liþiwe þeinaize jah ni allata leik þein gadriusai in gaiainnan.

nhd. Wenn dir deine rechte Hand Ärgernis schafft, so haue sie ab und wirf sie von dir. Es ist dir besser, daß eins deiner Glieder verderbe und nicht der ganze Leib in die Hölle fahre.

もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。

この例の got. „handus“ は間違いなく「手」であるが、つぎの got. „handgus“ の got. „handu – “ は「手」なのだろうか。

② コリント信徒への第一の手紙、1, 20 (以下 I.Kor.)

got. Hvar handugs? Hvar bokareis? Hvar sokareis þis aiwis? Nih dwala gatawida guþ handugein þis fairhvaus?

nhd. Wo sind die Klugen? Wo sind die Schriftgelehrten? Wo sind die Weltweisen? Hat nicht Gott die Weisheit dieser Welt zur Torheit gemacht?

知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。

handugs は、原典の gr. では σοφός ① (技術・芸芸に) 勝れた、熟練した ② 賢い、知恵のある (5) で、handugein は σοφίαν (σοφία 対格) である。

③ I.Kor.1,25

got. Unte so dwaliþa gudis handugozei mannam . . (以下散逸)

gr. ὅτι τὸ μωρόν του θεοῦ σοφώτερον τῶν ἀνθρώπων . .

nhd. Denn die göttliche Torheit ist weiser, als die Menschen sind

神の愚かしさは人よりも賢く、(神の弱さは人よりも強いからです)

L.10,21

got. inuh þizai hveilai swegnida ahmin Iesus jah quap: andhaita þus, atta, frauja himinis jah airþos, unte affallht þo faura snutraim jah frodaim jah handhulides þo niuklahaim. Jai, atta, unte swa warþ galeikaip in andwairþja þeinamma. jah gawandiþs du siponjam seinaim qap:

gr. ἐν αὐτῇ τῇ ὥρᾳ ἠγαλλάσατο τῶν πνεύματι ὁ Ἰησοῦς καὶ εἶπεν . ἐξομολογούμεθα σοι, πάτερ, κύριε τοῦ οὐρανοῦ καὶ τῆς γῆς, ὅτι ἀπεκρυας ταυτα ἀπὸ σοφῶν καὶ συνετῶν

nhd. Zu der Stunde frohlockte Jesus im heiligen Geist und sprach: Ich preise dich, Vater und Herr Himmels und der Erde, daß du solches den Weisen und Klugen verborgen hast und hast es den Unmüdigen offenbart. Ja, Vater, so war es wohlgefällig vor dir.

そのとき、イエスは精霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。

lat. ではこの二語はそれぞれ sapientibus (> sapiens) 「知恵ある」、prudentibus (> prudens) 「賢い」と訳している。

この handu- は古アイスランド語 (以下 aisl.) に継承され höndugr, hendugr, hönduglegr (6) engl „handy“ „behändig“ 「有能な、能力〈手腕・技能〉のある、役に立つ; 〈仕事などが〉きちんとした、りっぱな、優れた」(7) で engl. handsome の hand- により相応しいように思われる。ただし、これらの aisl. の単語は存在しないようだ。ゴート語が北歐・とくに中世アイスランド語のエッダ・サガにその痕跡を残していることは事実である。(8)

ディーフェンバツハは、handugs の語源が語根 hnth (lat. capere 「掴む」) から直接派生した

であろうと考えている。しかし、「手」から出発した語源の探求は結局、「不明」(dunkel)で、他の二次的な語幹 (Nebenstamm) から派生したのではないかと結論づけている。

ディーフェンバッハの捏造と思われる操作は、西ゲルマン語である古高ドイツ語では handugs ではなくラテン語の sapientia にあたる語を使っており、同じく西ゲルマン語である中世英語には、handsome が残っており (8)、東ゲルマン語であるゴート語の単語が北ゲルマン語で途切れていることが理由と思われる。

L2, 40

got. ip þamma barn wohs jah swinþnoda ahmins fullnands jah handugeins, jah anst gudis wa ana imma, ahd. (Tatian) (9) Ther kneht uuārlicho vvuohs inti strangeta fol sphidu, inti gotes geba uuas in imo, nhd. Aber das Kind wuchs und ward stark, voller Weisheit und Gottes Gnade war bei ihm.

幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

3. handugs と handsome を繋ぐミッシングリング

ディーフェンバッハが提唱している handugs の「語源」は「手」とは直接関わらない単語に求めるべきであろう。

got. 聖書の翻訳者 Ulfila は、ドナウ右岸のゴート人集落 (gotica minora) に暮らし、圧倒的なローマ帝国の文化・文明圏の影響を受けている。抽象概念から制度の名称の内、基礎語彙に関して、ローマ帝国の言語であるラテン語からの借用を前提に語源を探るべきで、「インド・ヨーロッパ語 (ゲルマン語)」という旧約聖書的な架空の言語を想定し、探索を始めると、たちどころに迷路に入り、行き詰まってしまう。

言語の入れ替えは一中南米がスペイン・ポルトガル語に席捲され、現地のことばが駆逐された状況から明らかなように一簡単におこなわれる。

圧倒的な「文明・文化」が、「後進国」のことばにいかに取り入れられるか、は英語と日本語との間にも見られる。

「ワイシャツ」の「ワイ」は engl. "white" で、借用経路は文字からではなく耳から入った engl. "white" が母語である日本語の「ワイ」と聞こえ、その音を文字に移したと考えられる。オリジナルと比べるとかなりデフォルメした音であるが実際の発音はまさに日本語の「ワイ」と聞こえる。engl. "water" 「水」が「ワラ」と簡略化した音に聞こえるのも早口の口語を聞いた時の現象—いわゆる「空耳」—である。

nhd. müssen 「・・ねばならぬ」の元にあるのは got. „mota“ 「収税所」である。この語は、lat. „moneta“ 「造幣所、貨幣、鋳型」をデフォルメした音で、実際の発音では „moneta“ の語間音 „-ne-“ が脱落して聞えたのであろう。あるいはゲルマン語風に直した形態であるかも知れない。

「お金」を払わなくてはならない制度上の機関である「収税所」という名前で呼んでいた。ここから、nhd. „müssen“ 「なにかあることをせざるを得ない、ほかになすべきことはない」つまり「(お金を払わなければ) ならない」「(お金を払う) 以外に方法はない」の意味に移行したことは想像に難くない。名詞として nhd. „Muß“ には、「やむを得ないこと、必然、必要不可欠、強制」などの意味として生き残っている。got. „mota“ の形態をそれほど変えていない単語として、nhd. „Maut“ 「(道路・橋などの) 通行料金、関税」がある。

この単語は、ゴート人居住区 (現在のブルガリア) に近いオーストリアに残っている。

got. „mota“ ⇒ ahd. „muozan“ ⇒ mhd. „müezen“ ⇒ nhd. „müssen“ と got. の名詞が ahd. 以降は動詞として使われるようになった。got. „-t-“ が nhd. „-ss-“ に代わる変化は engl. "water" が nhd. „Wasser“ 「水」に代わる変化で、音の変化としては特異なものではない。

さらに、lat. „moneta“ の本来の意味「お金」から派生したと考えられることばに nhd. „müßig“ (「1. 無為の、仕事をしないで(遊んで・ぶらぶらしている) 2. 無駄(無益の)、無意味な、余計な」)があり、意味の要に「お金」を想定すると論理が首尾一貫する。つまり「(お金をもっている故の) 無為」であり、「(お金をもっている故の余裕から) 無駄(なことができる)」という意味なのではないか。(11)

語形変化の観点からみても、名詞由来の動詞は弱変化という原則に合致する。語源辞書では nhd. „messen“ にあたる got. „ga-motan“ をあてているが、説得力が不足しているように思われる。(12) 動詞由来であれば、Ablaut(母音交替)が起こるはずだが、実際には „ü-u-u“ と Ablaut は起こっていない。

ゴート語が人名・地名だけでなく一般の単語も借用によっていることに対して、-特に音韻が歪んでいたり、省略がある場合-、ドイツの学者は慎重で、未だに「インド・ヨーロッパ語(ゲルマン語)」を頑なに信奉しているようである。ゴート語の内部だけで現代語に繋がることばの起源をさぐることは自然な国境がない環境では、非現実的であり、とくに文明国と野蛮な国との交流では上から下への影響・被影響を無視することは不可能である。いわゆる「共通祖語」なるものは机上の空論にすぎない。

Stutz (13) は、借用語にたいして、4つのグループと、借用翻訳・意味借用に2種類あるという。

「第一グループ：非教会系の比較的古い借用・外来語で、ギリシャ・ローマと近隣になる以前に他のゲルマン部族と共通に引き継いだ語彙：asilus「ろば」,kaisar「皇帝」,kaupon「買う」,pund「ポンド」,saban「亜麻布」,wein「ワイン」

第二グループ：非教会系の比較的新しい借用・外来語で、民族の交流による語彙：Augustus「アウグストゥス」,annom「(兵の) 給与」,Kreks「ギリシア人」,ana-kumbjan > lat. accumbere「卓につく」,militon > lat. militare「兵士である」,paurp(a)ura > lat. purpura「紫色」,sigljo > lat. sigillum「印」

第三グループ：ゴート語聖書の翻訳者ウルフイラ以前の教会語彙でラテン語またはギリシア語を話すキリスト教徒によってもたらされた語彙：aggilus < gr. ἄγγελος「天使」,aiwaggeljo, < gr. εὐαγγέλιον, lat. evangelium「福音書」,aikklesjo < gr. ἐκκλησία「教会」,aipiskauptus < gr. ἐπισκοπος「司教」,apaust(a)ulus < gr. ἀποστολος「使徒」,praufetja < gr. προφeteia「予言」,diab(a)ulus < gr. διάβολος「悪魔」

第四グループ：宗教的あるいは世俗的外来語で、ギリシア語原典から聖書翻訳によって初めてゴート語に登場した語彙：aiwxaristian < gr. ευχαριστια「感謝」,alabastraun < gr. ὀλοκαυτομα「(古代ユダヤ教の) 燔祭

同じく Stutz は借用する際の素材の問題に触れており 1. 外来語がゴート語の素材によって形を変えたもの。2. 受け継がれてきたゴート語の語が外来のことばの意味で使われる、なぜなら、ゴート語の意味の構成要素によって新しい概念を表すのに相応しいとおもわれるので。

1 の例：all-waldans > gr. παντοχρᾶτω, lat. omnipotens「全能の」など少なくとも 100 語。

2 の例：afletan「罪を許すこと」、ahma weihs「精霊」

本論の „handu-“ は、上記の分類に従えば、第一グループで、素材に関しては 1. または 2. と考えられる。しかし、Stutz は不完全な音の借用には触れていない。一つには検証が難しいこと。いま一つは恣意的な語彙の設定を許せば実証的な学問として語源学そのものが否定されかねない危惧がある。

しかし、仮説が首尾一貫して現代語の意味を説明するのに矛盾がなければ、新たな語源として認めてもよいのではないか。

3. (1) gr. „τειχοσκοπία (teichoskopie)“ 「町の城壁から観察する者たち」

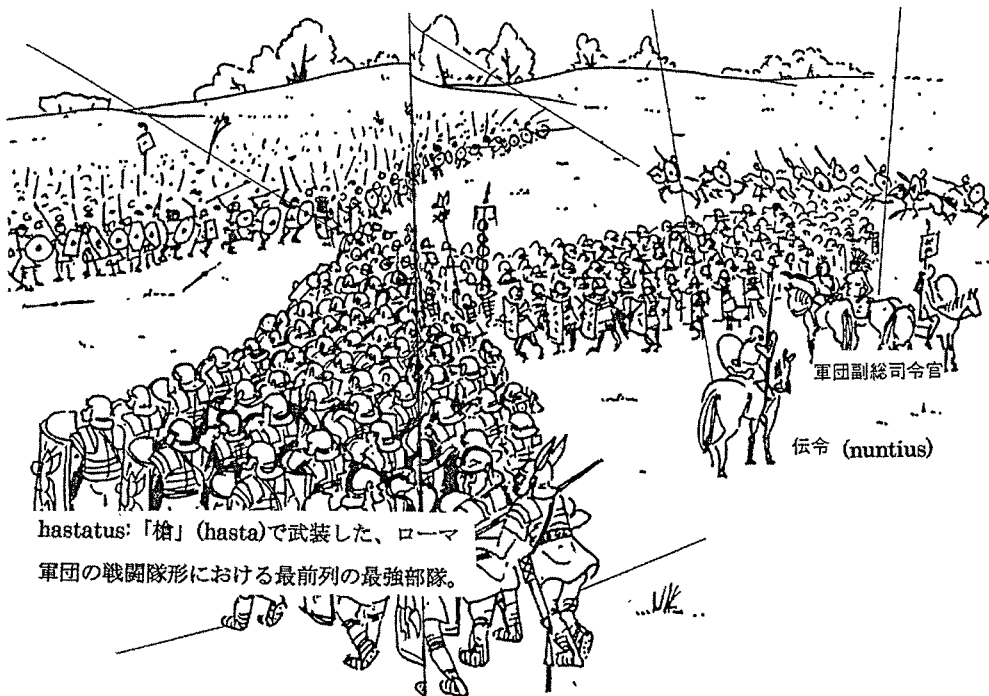
got. „handugs“ nhd. „die Klugen“ 「賢者」, got. „handugein“ nhd. „die Weisheit“ 「知恵」 got. „handugozei“ nhd. „weiser“ 「賢い」の „handu-“ は、民衆に布教するために、民衆が使っていることを聖書翻訳にも用いたと考えるのが自然であろう。また „handu-“ がデフォルメされた音でかつ意味として妥当なものを探ると候補の一つ目は gr. „τειχοσκοπία (teichoskopie)“ 「町の城壁から観察する者たち」である。

gr. „τειχοσκοπία (teichoskopie)“ 「町の城壁から観察する者たち」とは、ホメロスの『イリアス』第三歌 121-244 の技法に由来することばで、トロイ (ア) の町の城壁に立つヘレーナ (ゼウスの娘。絶世の美女でパリスによってトロイヤに連れ去られトロイ戦争の原因となった) が、トロイ王プリアモス (トロイ戦争で殺害される) に、隊をなして近づくギリシアの英雄たちの様子を詳しく語って聞かせる。なぜなら、英雄たちは全員ヘレーナに求婚していたので。

技法として、gr. „τειχοσκοπία“ は、芸術上あるいは舞台の都合で城壁の外で起こっていることを城壁の内側の人に伝える独白だが、質問によって中断されたり、„τειχοσκοπία“ 同士が話し合うこともある、あり。

Pauly (14) では、「最年長の者たち」、「賢者」を表すのに、「見えない世界のことを伝えてくれる者」という意味で „τειχοσκοπία“ は相応しいことばであるが、got. „handu-“ と音韻が合わない。„τειχο-“ は nhd. „Teig“ 「(パン・ケーキなどの) 生地、ねり粉」に直接つながる単語で、城壁の材料である「泥」に由来する。

ちなみに、ドイツ語とギリシアとの関係について、ライヒナウの大修道院長ヴァラハフリート・ストウラボ (849 年没) は次のように証言している。「ギリシア語の痕跡が我が言語にどうように至ったかを知りたいなら、次のように言えるであろう。野蛮人がローマ帝国内で兵役に就いていたこと、ならびにギリシア語とラテン語に精通した多くの伝道者が来て、野蛮人たちの間の誤っ



た信仰と戦ったこと。このようにしてドイツ語は、以前には知らなかった多くの有用な語彙を知るにいたった。とりわけゴート人に関して、この時期にゴート人はキリスト教に一むろん正しいキリスト教ではないが一改宗し、ギリシアに滞在し自分たちのことばを持ち、歴史の記述によると野蛮人たちの学者たちは神の本を自分たちのことばに翻訳した。」(15)

ギリシア語とドイツ語は上記のように宗教だけでなく日常生活においても浅からぬ縁で結ばれている。概念として „τευχοςκοπη“ がゲルマン語の中に残留していることは想像に難くない。

3. (2) lat. „nuntius“ 「伝令」「情報」

lat. „nuntius“ 「伝令」は、戦場において、総司令官からの命令を戦列の指揮をとる軍団副総司令官に手渡す。「伝令は通常槍に鳥の羽根をつけて目印とした」、とある。「副総司令官は戦列のすぐ後ろで指揮し、責任区域内で危機におちいつているところを見つけるとそこへ駆けつけ、兵士を叱咤激励しながら、予備部隊の投入によって増援をおくる命令を下す。」(16)

挿絵(想像図)参照。

伝令は、戦場においてかなり目立つ存在であり、伝令から手渡された命令によって軍団の命運が決まる。また、伝令の印として羽根が槍(lat.hasta)の上に付けられた。lat.„nuntius“とlat.„hasta“ „hastatus“ (槍で武装した最前列の最強部隊)を混同した、あるいはこの三者を合わせて一つの単語を生み出したのではないか。

歴史的事実として、3世紀半ば、ゴート人は、黒海沿岸の(東)ローマ帝国に侵入、高度の文明とキリスト教と出会う。332年コンスタンティヌス大帝に敗北、講和条約を結ぶ。(17)

これからは、筆者の勝手な想像だが、ゲルマン人捕虜が伝令の戦場における活躍を見て、その格好の良さ・すばやさに感銘をうけたことは可能性としてあり得る。図参照 (18)



紀元後1世紀のブロンズ像。
鎖に繋がれたゲルマン人。
裸の上半身とこめかみで結ばれた髪はローマ人には典型的なゲルマン人でスエビ族の戦士。

「伝令」の lat. „nuntius“ を① „handugs“ と聞き違えたのか、②あるいは母語にある got.„handus“ 「手」と関連付けたのか、③あるいは命令書を「手渡す」行為を見て got. „handugs“ を「伝令」という意味ではなく、lat. „nuntius“ の2番目の意味である「知らせ・報告・指示」の意味で用い、「情報」の意味の “intelligence” に意味が移行していったのではないか。

nhd.behände,behend,behende「すばやい、巧みな、手際のよい」の „-hend(e),-hände” は「手」を元に解釈すると、意味が曖昧で十分に納得すべき一貫性が乏しい。いわく「器用な、素早い」という意味の „behend(e)” は、「器用さを必要とする、適合した、巧みな、速い (mit Geschick zu bra

uchen, passend, geschickt, schnell) は、mhd. の副詞 „behende” 「器用な、速い」に由来し、さらに ahd. „bî henti weist (bei + hant 「手」の与格) で本来は「手において」という意味であった」、という。(19)

何故、「手」だけが「素早く・巧み」なのか上記の解釈では漠然としていて、この語が engl. „handsome” とどう繋がるのかも不明のままである。

この „-hend(e), -hände” が lat. „nuntius” の変形したものと措定すると、意味がいきいきと甦る。

Dann entkleidete sie sich mit eigenen behenden Griffen (Hagelstange, Spielball 63) (20)

「それから彼女は、独特の手さばきでテキパキと服を脱いだ。」

„Griffen (Griff)” は「つかみ取る事、指のタッチ」で、語源辞書の解釈によると「手において」を意味する „behend” と「つかみ取る事」は意味が重複する。„nuntius” のように「戦いの中でも沈着冷静に素早く」と解釈するとより情景が鮮やかによみがえるように思われる。トロイ戦争を扱ったこの作品で、著者は意識的に古風な単語を使っているだけかもしれないが。

4. got. の handus を受け継ぐ Schick と handsome

“handu-” の語源は、gr. „τεχνοσκοπε”、lat. „nuntius” „hastatus” の三者が融合したことばなのではないか。音としては lat. „nuntius” „hastatus” の融合、意味は gr. „τεχνοσκοπε” がゲルマン語としてあらたに造語化された「借用語」と考えると、“handugs” の訳語「賢者」から engl. “handsome” 「有能な、能力〈手腕・技能〉のある、役に立つ；〈仕事などが〉きちんとした、りっぱな、優れた」との整合性がとれるのではないか。また4世紀にドイツ語から分かれた engl. “handsome” が「男性のみに用いること、〈仕事などが〉きちんとした」という意味内容が指し示しているのは lat. „nuntius” „hastatus” ではないだろうか。

両者とも、男の中の男であり、ゲルマン人の捕虜・傭兵からみても惚れ惚れするような姿形であった、と想像される。

engl. “handsome” の訳語である nhd. „Schick” はなぜ „schicken” 「送る」なのか、過去分詞の „geschickt” がなぜ「器用な、巧みな、じょうずな、手際の良い」の意味なのか、また „Gesandt > senden 「送る」 “が「外交使節」を意味するのか、これらの裏にはすべて lat. „nuntius” (nhd. Bote 「使者」) が隠れているのではなかろうか。

語源辞書の記述に関係なくことばの意味が指し示す方向を遡り、ギリシア語・ラテン語とゴート語を「印欧語比較文法」の視点からではなく、虚心坦懐に比較すると新たな語源の可能性が拓かれるように思われる。

nhd. „müssen” の語源である got. „mota” は明らかに lat. „moneta” を借用している。lat. „moneta” は、lat. „Juno Meneta” の神殿で貨幣が鑄造されたことに由来する。

「印欧語文法」が想定する「文明人」としてのゲルマン人はここには存在せず、ギリシャ・ローマという二大文明を必死に吸収しようとする健気なゲルマン人の姿である。

注

(1) 『言語学小辞典』下宮忠雄 P.86 ~ 87 (1985, 東京)

(2) ジーニアス英和大辞典 (電子版)

(3) English Etymology (Oxford, 1996)

(4) Stutz, E. Gotische Literatur S.3 (Stuttgart, 1966) Kluge, F.: Die Elemente des Gotischen S.1 (Berlin und Leipzig, 1921)

(5) 古川晴風『ギリシャ語辞典』(東京、1996)

- (6) Diefenbach,L.,Vergleichendes Wörterbuch der gothischen Sprache (unveränderter Neudruck, 1851: Schaan/Liechtenstein 1983) S527-528
ただし、以下のアイスランド語辞典には記載なし。
Cleasby:Icelandic-EnglishDictionary (Oxford,1969)
Baetke,W.:Wörterbuch zur altnordischen Prosaliteratur (Darmstadt,1976)
- (7) 国松孝二『独和大辞典』(東京、1985)
- (8) Middle English Dictionary
- (9) Tatian:Sievers.E.
- (10) Stutz,E.:ibid S.1
- (11) 拙論「ゲルマン語における話法の助動詞について」桐蔭論叢第 27 号 (2012 年) S. 54-55
- (12) Etymologisches Wörterbuch des Deutschen (Berlin,1989)
- (13) Stutz,E.:ibid s.75-77 (Stuttgart,1966)
- (14) Der kleine Pauly (München,1979) ; ホメロス『イリアス』松平千秋 (東京、1992)
- (15) Stutz,E.:ibid s.81 (Stuttgart,1966)
- (16) Goldworthy:The complete roman army (『古代ローマ軍大百科』東京、2005
P. 176-178) 挿絵も同上。
- (17) Stutz,E. ibid
- (18) Pöppelmann,H.:Roms vergessener Feldzug S.192 (Darmstadt,2013)
- (19) ibid. (9)
- (20) Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache (Mannheim,1977)